

中部大学日本伝統文化推進プロジェクト

NIHON



BUNKA

—— 2020年度活動報告書 ——



## ごあいさつ

〈中部大学日本伝統文化推進プロジェクト〉の2020年度活動報告書をお届けいたします。本プロジェクトは、中部大学の文化発信活動の一環として、なかでもグローバル化時代を生きる学生たちに本物の伝統文化に触れてもらいたい、との願いを込めて、2019年4月に始動しました。

2020年度は、新たな趣向も加えて企画しておりました。しかし、春からCOVID-19パンデミックに襲われ、春学期予定の企画はほとんど実施できませんでした。そうしたなかで、人文学部日本語日本文化学科との共催による、学生向けの実習（日本舞踊と能楽のお稽古）は実施することができました。ご尽力いただいた西川千雅先生と久田勘鷗先生には、心から感謝申し上げます。ちなみに両先生には、本学の客員教授にご就任いただいております。

秋学期には、感染予防に細心の注意を払いつつ、いくつもの企画を実施しました。今年は年間通してのテーマを「百人一首」に決めました。百人一首は、和歌という日本語でこそ可能な宮廷文芸ですが、かるたの形式によって、時を越えて広く深く民衆に親しまれ、さまざまな文化のうちにも取り込まれ、今に息づく伝統文化となっております。百人一首を研究する吉海先生のご講演、久田先生による、百人一首を取り込んだ能楽の曲の解説と「通小町」の実演（遠隔併用）、および原田凍谷先生ご協力による書道展「百人一首を現代書で書く」を実施しました。また江戸時代から続く「からくり人形」の講演・実演を、ロボット理工学科と共催で行いました。講談・落語公演会「話芸の世界」も行いました。ただ残念ながら、いずれも学内限定の企画となり、広く地域の皆さまには公開できませんでした。

パンデミックは文化活動の大きな阻害要因です。心おきなく文化活動が可能な日常が戻ることを切に願いつつ、次年度にむけた企画をいたします。困難な状況のなかで、格段のご協力をいただいた方々に、改めてお礼申し上げます。

2021年3月

中部大学日本伝統文化推進プロジェクト長  
副学長 辻本雅史

## 目 次

1. 実施一覧	3
1.1 能楽鑑賞会	4
学生の感想	5
1.2 からくり人形公演会	8
1.3 落語・講談鑑賞会	12
1.4 百人一首講演会	14
1.5 日本伝統文化講座	16
学生の感想	17
1.6 原田凍谷書道展	25
1.7 放送研究会の活動	26
2. プロジェクト活動記録	28
3. プロジェクト名簿	29

## 2020年度日本伝統文化推進プロジェクト 実施一覧

### ■からくり人形公演会

日 時：10月28日（水）15時20分～16時50分

場 所：三浦幸平メモリアルホール

講演者：玉屋庄兵衛氏、末松良一氏

参加者：121名（学生87名、教職員34名）

### ■百人一首講演会「かるたと融合した百人一首」

日 時：11月4日（水）15時20分～16時50分

場 所：不言実行館アクティブホール

講演者：吉海直人氏

参加者：82名（学生73名、教職員9名）

### ■書道展「百人一首を現代書で書く」

日 時：10月26日（月）～11月30日（月）

場 所：不言実行館1階

### ■落語・講談鑑賞会「話芸の世界」

日 時：11月25日（水）15時20分～16時50分

場 所：不言実行館アクティブホール

講演者：登龍亭獅籠氏（落語）、旭堂鱗林氏（講談）

参加者：120名（学生95名、教職員25名）

### ■能楽鑑賞会「通小町」

日 時：12月2日（水）15時20分～16時50分

場 所：不言実行館アクティブホール

講演者：久田勘鷗氏、久田三津子氏、他

参加者：22名（教職員22名）

### ■日本伝統文化講座（古典文学研究会 能楽・日本舞踊・茶道）

日 時：能楽 5月22日（金）、6月19日（金）、7月3日（金）

15時20分～16時50分

日舞 5月8日（金）、5月15日（金）、6月5日（金）、6月12日（金）

15時20分～16時50分

茶道 5月29日（金）、6月26日（金）15時20分～16時50分

場 所：2811講義室（能楽・茶道）、ダンススタジオ（日舞）

講演者：久田勘鷗氏（能楽3回）、西川まさ子氏（日舞4回）、谷口剛久氏（茶道2回）

# 能楽鑑賞会

講 話 久田 勘鷗（シテ方観世流能楽師）

舞囃子 「通小町」久田勘鷗



中部大学日本伝統文化推進プロジェクト  
NIHON BUNKA  
日本文化を学ぼう！  
——日本の伝統芸能——  
**通小町**

深草少将が小野小町のもとに百夜通い詰め、九十九夜にして亡くなったという説話の後日談として、小町の亡霊が、深草少将の亡霊とともに成仏する事を描いた通小町をお二方とも無形重要文化財に認定された観世流の久田勘鷗師と久田三津子師が演じて下さいます。

公演者  
HISADA KANOH  
**久田 勘鷗師**  
HISADA MITUKO  
**久田 三津子師**

2020年 **12**月 **2**日(水)  
15:20～16:50 (開場15:00)  
不言実行館1階 アクティブホール  
< 要申込 >  
エントリーフォームより申込ください

中部大学 申込先: 関係先: 日本伝統文化推進プロジェクト事務局 (人文学部事務室内)  
エントリーフォーム <https://www.chubu.ac.jp/humanities/02/>  
〒487-8501 愛知県豊田市松本町1200 TEL: 0568-51-4144 E-mail: jinbun@office.chubu.ac.jp

12月2日（水）15時20分から、例年行われてきた観世流の久田勘鷗師、久田三津子師による能楽鑑賞会が開催された。演目は「通小町」であった。折から本学はコロナウィルスの影響で学生が大学に来る事ができなくなってしまった。その為、急遽学内の教職員を対象にして開催し、後からビデオ配信する方針が決まった。今回は百人一首が統一テーマであったので、前半は久田勘鷗師が、「能楽と百人一首」に関して詳しく説明して下さい。後半の「通小町」は、百人一首にも登場する小野小町の深草少将との恋の話である。百日自分の元に通ったら、恋を成就させるという小町の言葉にしたがって、九十九日通つめるものの百日目に息たえたという話を元にした能である。学生はおよそ二百八人の学生を対象にビデオ配信をした。

# 学生の感想

## 日本語日本文化学科 1年男子

初めて「能」というものを鑑賞し、一番印象に残ったのは、迫力でした。声を出している人たちの声質や声量、鼓の音が混ざり合っってすごい迫力を感じました。重そうな衣装を着て歌いながら移動し続けるのはとても疲れそうだと思います。動画越しでも伝わるほどの迫力で、その場で見るのができたらもっとその迫力を体験できたのではないかと思います。次に見るときは間近で見たいと思いました。

説明の時に歌の名前を言っていました、数の多さにも驚きました。百人一首の説明をされているときに、高校や中学校で習ったものも出てきて、学校の中で大会などもあったので少し懐かしかったです。私が通っていた高校は仏教高校で、仏教の行事があるたびに「歎仏偈（たんぶつげ）」というお経のようなものを唱えていました。それを唱えるときの拍の使い方が先生の歌い方と少し似ていて何か関係があるのかと思いました。

鬼の話聞いたときに、鬼というのは基本的に悪いものというイメージがありますが、話していた内容では地を守っているということで、悪いものではなくなにかを守っているという鬼もいることを知りました。

百人一首を高校や中学校で学んだときは、内容重視ではなく歌自体を暗記することに力を入れていましたが、それぞれの歌にいろいろなストーリーがあって、それを知ることによって百人一首がもっと面白くなるのではないかと思います。次に百人一首を学ぶ機会があれば、暗記するだけでなく内

容をもっと重要視して学びたいと思います。有名なものは今でも覚えているものが多いですが、有名ではないものは全く覚えていないので、まんべんなく内容も歌自体も学びたいです。種類が多いため、全部の内容や歌を完全に覚えることは難しいと思うので、初めは気になったものだけでも少しずつ覚えていきたいです。百人一首は友達やいろいろな人と一緒に楽しく覚えられるものだと思います。友達やいろいろな人たちと競い合いながらやることで、お互いに頑張れるし、目標も立てやすくなっていいと思います。中学校の頃は百人一首の大会があって、とても楽しかった思い出があるので、今回の能楽鑑賞会を通してもう一回やってみようと思いました。百人一首の歌のように自分たちでオリジナルの歌を作ってみるのも楽しそうだと思います。高校の頃に一回だけ授業で、オリジナルの歌を作った思い出があるのですが、とても難しくていいものが作れなかったです。有名な歌のように美しさや面白さを身近な言葉で表すのはすごく難しいものなのだ実感しました。もっと学んでいけば、少しでも良いものが作れるのではないかと思います。



## 日本語日本文化学科 1年男子

今回は新型コロナウイルスの影響もありリモートでの鑑賞となりましたが画面越しでも素晴らしい発表を見ることができとてもいい経験となりました。能の鑑賞については正直テレビでほんの少し見た、中学の音楽の授業で「日本の文化」というくくりで扱った程度でしかなく知識も全くなかったため今回ほぼ初めての状態での鑑賞となりました。

当時から現在までの能の第一印象は女の人やおばあさん、般若といった人間の顔を模した少し不気味な面をつけ、きらびやかな衣装を着用し、楽器に合わせて演技をするという印象を持っていました。ただ、室町時代から現在まで長きにわたり受け継がれてきた大切な「日本の文化」であるということはしっかりと理解しています。

初めは能について説明があったのちに謡から始まりましたが、始まったとたんその場になくても空気が変わったことが分かり、声だけでも抑揚や文章の切り方により演技をしているのと同じぐらい迫力を感じました。正直、声だけで圧倒される経験などあまりしたことがなかったので演技を見る前に衝撃を受けました。それほど腹から出ているような声に圧倒されました。

演技では声の出し方はもちろん小道具や細かい動き（目線の高さを一定に保ちながらすり足で歩く能独特の歩き方など）、語りをつけることでさらに臨場感がでて朗読とはまた違った迫力が感じられました。謡と演技でまた違った一面を見ることができ、より一層の能の深さを実感したのと同時

に実際の方で見てみたかったと改めて思いました。

また能の謡は男性が行うものだと勝手に思っていたので女性の方も語りとして参加するのを初めて知り驚きましたが女性ならではの声で演技にもなじんでいたのすごいなと思いました。

謡曲や演技だけで物語を表現するという技術は一般の人には到底できないことでもあるため、能の世界にいる人たちは技術を身に着けるためには相当苦労されているのだと思いました。

私は小学生の時に地域のお囃子に参加していたので後ろにいらっしゃった方がもっていた楽器（特に打楽器など）はある程度知っているものですが、当時演奏していた方法とは比べ物にならないくらいほど当時の演奏は小学生のレベルに合わせたお遊び程度のものであったのだと実感しました。その一方でプロのたたき方は演技に合わせて打つタイミングも素晴らしく地域のお囃子とは違い、音が雑に混ざりあうことなく、ひとつひとつの楽器の音をはっきりと聞こえ、個々の音にも特徴があり聞いていて心地良かったです。

今回はこのような形となり実際に見ることはできませんでしたが今後また見る機会がありましたら、積極的に鑑賞するように心がけ、大学生活の中で少しでも多く「日本の文化」に触れられるよう日々学んでいきたいです。



## 日本語日本文化学科 1年男子

私は能を今まで一度も映像でも見たことがなく、今回が初めての体験であった。イメージは歌舞伎と違って面を付けて一種の役を演じるというもの、あまり理解できず見るだけでは面白くないものだと思っていた。しかし、一種のミュージカルのようなもので、面を付けずにやることもあるという事を初めて知った。また、能には弦楽器がないという事が途中で触れられていたが、後ろを見ると確かに箏や琵琶などの弦楽器が無くて笛と鼓で構成されていた。弦楽器がないにもかかわらず、大鼓と小鼓、笛の三種類だけで場の臨場感、壮大さが増した。それと同時に音の繊細さがここまで出てきていて、舞っている人と謡っている人の邪魔にはならないのに存在感があった。また、なぜあの変化がつけにくい楽器で表情をつけることができたのかという事も気になった。他にも狂言との違いも気になった。

演目に関しては、百人一首に関連して演目が構成されているのも初めて知り、驚きの連続であった。実際、動画の1時間弱がずっと能で構成されていると思っていたら、最後の15分くらいのみ能の演目だった。また、1つの演目がこんな短さなのかということも感じた。演目の内容に関して、正直な感想を言うと聞いても内容が頭の中で変換できず、最後の解説が無ければ全くと言っていい程分からなかったために、これが他の演目や能面の有無、しゃべり口調やリズムでどう変わるかも気になるが、一番私が分からなかったのが古典系

の歌の詠み方、しゃべり方であった。しかし、解説があったおかげで何となくではあるが、どういった内容だったのかという事を知ることができて良かったです。

このアクティブホールは一般的な文化ホールと比べると小さいが、それでも広い空間にしっかりと聞き取れる声で、きれいな高低音を出してマイクに收音出来ている発声方法にも驚いた。ここで、思い出したのだが、よくよく考えると能の演目の際に後ろの人たちが奏でている楽器と謡以外が完全に無音ではないかと思うくらい、舞っている時の歩くときの音や服が擦れる音が聞こえなかった事もとても驚いた。

この能は観阿弥と世阿弥が今から700年ほど前に生み出した芸能であり、それがこの時代まで続けられ、なぜ能という演劇が生まれたかという部分にも疑問が多く残った。今まで能は教科書に書いてある日本の文化で、言葉でしか触れる機会がなく今回初めてしっかりと能に触れることができた。自分は何も知らなかったのだなと痛感したと同時に疑問が多くなった。今後、私が能に触れるならば、分かりやすい演目を見るなど、歌舞伎や狂言を一度でも見て内容を比較したりするなど、疑問点を一つでも解消できるような見方をしてみようと感じた。私は能楽も歌舞伎もそういった日本文化芸能を全く見ることもなければ自分では見ようとも思わなかったのもので、今回は動画ではあったものの、とても良い鑑賞会の経験であった。

# からくり人形公演会

講師 末松良一（九代玉屋庄兵衛後援会会長）

実演 玉屋庄兵衛（からくり人形師）

2020年10月28日(水)  
15:20～16:50(開場15:00)  
三浦幸平メモリアルホール

<要申込>  
下記エントリーフォームより  
お申込ください

九代玉屋庄兵衛氏による  
「からくり人形」の実演・解説と、  
同後援会会長である  
末松良一氏が、なぜ  
江戸時代からくり人形が  
庶民に浸透し発達  
したのかについて講演。  
からくり人形が日本人の  
ロボット観を育み、  
日本のものづくりの源流として  
貢献してきたことを紐解く。

中部大学日本伝統文化推進プロジェクト  
×  
中部大学工学部ロボット理工学科  
**NIHON  
BUNKA**  
日本文化を学ぼう！

からくり人形師  
九代玉屋庄兵衛

1995年に玉屋庄兵衛を襲名。名古屋の  
工房で創作からくりの製作、各地の山車から  
くりの復元修復を行い、海外でもからくり人形  
の発信活動を行う。「愛知の名工」「祇園祭山鉦  
行事功労者」「現代の名工」など各種表彰も受ける。

中部大学

申込み・お問合せ先 日本伝統文化推進プロジェクト事務局（人文学部事務室内）  
エントリーフォーム <https://www.chubu.ac.jp/humanities/01/>  
〒487-8501 愛知県豊田市松本町1200 TEL: 0568-51-4144 E-mail: jinbun@office.chubu.ac.jp

2020年10月28日に本学メモリアルホールにて、九代 玉屋庄兵衛さんをお招きして「からくり人形の実演」と、名古屋大学名誉教授で玉屋庄兵衛後援会会長でもある末松良一先生からその文化的な背景をお話しいただいた。この公演会は、伝統文化の意義を文系学生だけでなく理工系学生にも広く知ってもらい、本学学生に国際人としての視点を得てもらうきっかけ作りを目的として、日本伝統文化推進プロジェクトと工学部ロボット理工学科とで共同開催いたしました。参加者は、新型コロナの影響もあり学内の学生教職員に限りましたが、多くの参加をいただきました。

まず、公演会の最初に、末松先生から「からくり」とは、日本のものづくりの源流であり、伝統文化としてだけでなく工学的な観点からも現代につながるものであること、そして、未来へとつながっていることについて講話をいただきました。

具体的には、「からくり」という言葉は、日本独特の意味が込められた言葉になっていることを歴史的な観点から解説されました。特に、江戸時代は「からくり」が日本中を席卷した時代です。寛文2年（1662年）、大阪道頓堀に竹田からくり芝居が旗揚げされました。そこでは、庶民が安い木戸銭（見物料）で「一日中楽しむ」ことができたとの記録があります。この流れを汲んで、毎年「山車からくり祭」が例祭において奉納されています。現在、日本全国あわせて山車からくり祭は80地区で開催されていますが、その半分が愛知県で実施されています。中でも名古屋東照宮祭（1618年より開催）では、1619年に西行人形を載せて開催され、1707年にはすべての山車にからくり人形が載せられたとの記録があります。



末松良一先生（九代玉屋庄兵衛後援会会長）

現代のからくりとして、工場で実際に使われている部品搬送台車の例を紹介されました。これは、重量のある部品を台車に載せると、その重みも利用しながら台車が搬送先に移動させ、同時に台車内のバネを圧縮して進み、その復元力を利用して元の位置に台車を戻すものです。後日、ロボット理工学科の学生の一人が、これを作ってみたいと相談を持ちかけてきました。

末松先生の講話に続いて、九代 玉屋庄兵衛さんが茶運び人形、弓曳き童子など3種類のからくり人形を使って、ユーモラスで情熱にあふれた実演と解説をしていただきました。同氏は、YouTubeで“Karakuri puppet”と検索すると数多くの動画が世界中から視聴されていることから、国内だけでなく「からくり人形師」として世界的にも有名な方です。

最初に、江戸時代の上流階級が集まる茶会で人気を集めた「茶運び人形」を紹介されました。今ではあまり見なくなった「ぜんまい」をまくと、参加者の中から選ばれた貴人役の学生の

ところに向かってなめらかに動き始め、貴人役の学生の手前でまるで AI 搭載のロボットのように優雅にお茶を運び、お茶を飲み終わるまでその場で待ち、お茶碗を受け取ると、満足げに頷くように首をそっと揺らしながら主人の所へ戻って行きました。ちょっとした仕草ですが、人と人とのインタラクションを誘発する繊細さをもった「からくり人形」は、海外の「パペット」とは違うところです。ロボット理工学科の教員としては、このことを誰かに気づいて欲しいと願っておりましたところ、気づいた学生がおり、あとでおしえてくれました。思わず「凄いぞ、君は」と感激しました。他にも、7種類の異なる木材を適材適所に使い分けることで、なめらかな動きや仕草を作り出していることを知った学生達は、熱心にメモを取っていました。メモ用紙を忘れたので、持ってくれば良かったと後悔している学生もおり、今この瞬間を記録にとどめておこうとする意欲ある学生の多いことに、うれしくなりました。

続いて、弓曳き童子は、からくり人形の中でも最高傑作に表されるもので、見た目の美しさだけでなく、材料の良さ、動きのなめらかさが特徴であり、所作のエレガントさは、とても一つのぜんまいから生み出されているとは思えないほど繊細な「間合い」を持つものです。弓の弦を人形自身が確実に曳き、的に向かって矢を放ちます。ここ



玉屋庄兵衛氏 (からくり人形師)

でも、顔の表情という繊細で日本らしさを感じる部分に心血を注いだからくりが活かされています。現代の AI ロボットティクス分野がまさに挑もうとしていることの一つの解を、江戸時代に見つけていることに驚きを禁じ得ません。

今回は、新型コロナという苦難の時代にありながら、知識や体験を広げていこうとする学生達が多くいることに改めて気づかされました。日本が誇る伝統文化の良さを参加者だけでなく、参加できなかった学生にも伝えることを試みてくれた人文学部の学生達が大変上手に編集してくれたビデオがあります。是非このビデオをご覧いただければ、文字の報告書よりも、繊細で優雅なからくり人形の動きに食い入るように目を輝かせながら参加していた学生の生き生きとした姿をご覧いただけたと思います。

この公演会にふれあうことができた学生が、その家族が、その友達が、一人でも、町のお祭りに目を向けてくれますように。



茶運び人形 (撮影:老川良一)



茶運び人形 (撮影:老川良一)



弓曳童子 (撮影:老川良一)



# 落語・講談鑑賞会 「話芸の世界」

第一部 講談の世界 旭堂鱗林 「日吉丸の誕生」  
 第二部 落語の世界 登龍亭獅篁 「時きしめん」

中部大学 学術文化推進プロジェクト  
**NIHON BUNKA**  
 日本文化を学ぼう!

—日本の伝統話芸—  
**講談と落語の世界**

2020年  
**11月25日** (水)  
 15:20～16:50 (開場 15:00)  
 不言実行館アクティブホール  
 <要申込>  
 下記エントリーフォームよりお申込ください

一演目—「太閤記」より  
**「日吉丸の誕生」**  
 旭堂鱗林 きょくどう・りんりん  
 <プロフィール> 幼稚園教諭とプライダルコーディネーターを経て、1999年に名古屋で活動するタレントとしてデビュー。2006年、水谷ミミ(風麟)から上方講談師旭堂南麟道場の紹介を受ける。3年間講談道場に滞在し、2009年春、南麟の「麟」の字をもらって女流講談師旭堂鱗林となる。現在、東海ラジオ「多田木・古池茶の間でショウ」、「あかひげ先生ズバリ解決」、FMラジオサンキューなどに出演。

第一部  
 講談の世界

一演目—  
**「時きしめん」**  
 登龍亭獅篁 とうりゅうてい・しかご  
 <プロフィール> 1994年6月、立川談志に入門、立川志加吾を名乗る。2003年8月、名古屋唯一の落語家、雷門小堀門下に移籍して、雷門獅篁となり、2020年に登龍亭獅篁と改称。世界でただ1人のプロの落語家+漫画家。ぶんか社「本当にあった突え話」誌上にて「雷とマンダラ」連載中。著書に「名古屋式」、「マガジンのハウス」などがある。現在、FMラジオサンキューでパーソナリティー。名古屋文化短期大学、毎日文化センターで講談を務める。

第二部  
 落語の世界

申込み・お問合せ先 日本伝統文化推進プロジェクト事務局 (人文学部事務室内)  
 エントリーフォーム <https://www.chubu.ac.jp/humanities/01/>  
 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 TEL: 0568-51-4144 E-mail: jinbun@office.chubu.ac.jp

日本の伝統的な話芸に親しむ機会として、2020年11月25日(水)、不言実行館アクティブホールにおいて、講談師の旭堂鱗林さんと落語家の登龍亭獅篁さんをお迎えして公演会を開催した。参加者は、学生95名、教職員25名、計120名であった。

旭堂鱗林さんは、名古屋市熱田区出身の講談師で、昨年度に引き続き、2回目の公演である。前回の演目は創作講談「藤井聡太物語」で、当時の藤井七段が将棋棋士になるまでのエピソードを講談の語り口で披露された。今回の演目は、古典講談『太閤記』の「日吉丸の誕生」で

ある。現在の名古屋市中村区で産声をあげた豊臣秀吉の一代記にふさわしく、軽妙な名古屋弁で披露され、講談になじみのない学生たちも興味津々の様子であった。

登龍亭獅籠さんは静岡県浜松市出身で、はじめに立川流（立川談志門下）に入門し、立川志加吾と命名され、その後雷門小福門



下に移籍し、雷門獅籠と改名された。さらに、2020年4月に名古屋を拠点とする落語家一門「登龍亭」を興し、登龍亭獅籠と改名された。漫画やイラストレーションを得意とされ、学生の



似顔絵を描いてその腕前を披露された。今回の演目「時きしめん」は、上方落語の「時うどん」、江戸落語の「時そば」と同じ主題である。この噺の見せ場である、麵を勢いよくすすする場面の表現は見事で、勘定をごまかす男の巧妙さと、それをまねた男の間抜けさがおもしろく演じられていた。

今回の公演会に参加した学生の大半は、日本語日本文化学科の1年生であった。新型コロナウイルスの感染防止のため、彼らは入学式もなく、春学期はすべて遠隔授業であったため、大学での人間関係に不安を抱く者が少ないようである。しかし、今回の公演会では、元気な笑い声が多く聞こえ、会場は終始和やかな雰囲気にもまれていた。今後もこのような機会を持ちたいと願う。



# 百人一首講演会 「かるたと融合した百人一首」

講師 吉海直人（同志社女子大学特任教授）

2020年11月4日(水)  
15:20~16:50 (開場15:00)  
不言実行館1階 アクティブホール  
<申込不要>

中部大学日本伝統文化推進プロジェクト  
**NIHON BUNKA**  
日本文化を学ぼう!

**かるたと融合した百人一首**  
— 教育玩具になった古典 —

百人一首はかるた取りとして広く知られ、古典文学で唯一、遊びと学びが一体化した教育玩具であった。しかもかるたは百パーセント百人一首であり、かるたは形を変えた百人一首の一諸本であるといった特殊な側面を掘り下げていく。

**吉海 直人**  
一九五三年、長崎県長崎市生まれ。現在、同志社女子大学表象文化学部特任教授。専門は平安時代の物語及び和歌文学。特に『源氏物語』と『百人一首』。主な著書に『百人一首かるたの世界』(新典社新書)、『百人一首の正体』(角川ソフィア文庫)の他、多くの著書がある。

中部大学 お問い合わせ先 日本伝統文化推進プロジェクト事務局 (人文学部事務室内)  
〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 TEL: 0568-51-4144 E-mail: jinbun@office.chubu.ac.jp

11月4日(水)に 不言実行館アクティブホールにおいて、吉海直人氏による「かるたと融合した百人一首—教育玩具になった古典—」と題する講演が行われた。コロナ禍の中、感染対策を徹底して開催され、学生73人、教職員9人が出席した。

講師の吉海直人氏は平安時代の物語、和歌文学を専門とされ、百人一首研究の第一人者として知られる。

講演は、百人一首常識〇×クイズの出題や解説から始まり、百人一首の特徴、教科書とし





ての百人一首、女子用往来としての百人一首、かるたと融合した百人一首、百人一首の商品価値を考える、と内容は多岐にわたった。

在原業平の和歌であり、漫画のタイトルでもある「ちはやふる」の表記一つとっても、「ちはやふる」と「ちはやぶる」ではどちらが正しいのか。どちらも正しいというのが答えであるが、時代や作品によっ



て清音と濁音の違いがあること、清少納言の和歌「鳥の空音は」が『枕草子』の伝本によっては「鳥の空音に」であること、蝉丸の扱いが玩具メーカーによって異なること等々。

このようなクイズ形式や問いかけを多用しながらも、「常識にとらわれるな」という名言を繰り返され、学生から教職員まで思い込みを覆され、研究姿勢を問われるような刺激的な内容であった。

百人一首は古典文学で唯一、遊びと学びが一体化した教育玩具であるが、かるたは百人一首の一諸本であり、百人一首はかるたになったことで諸本が倍増したのみならず、飛躍的な大衆化を遂げた。これは『源氏物語』や他の古典では不可能なことであった。そのような特殊な側面が掘り下げられた講演であった。

講演会で吉海氏から出された百人一首常識○×クイズは、次のとおりである。

1. かるたは平安時代から遊ばれていた。
2. 「かるた」は日本語である。
3. トランプとかるたとの違いは読み手の有無である。
4. 読み札には昔から歌一首が書かれていた。
5. 第二次世界大戦中、かるた競技は禁止されていた。
6. 現代仮名遣いのかるたで名人戦が行われたことがある。
7. 百人一首の正式名称は「小倉百人一首」である。

《クイズの解答》

1. ×江戸時代から。
2. ×ポルトガル語。
3. ○トランプに読み手は不要。
4. ×昔は上の句だけだった。
5. ○恋歌が多かったことが要因。
6. ○昭和30年の第一期名人戦。
7. ×「小倉」が冠されたのはずっと後。

# 日本伝統文化講座

科目担当 人文学部 日本語日本文化学科 岡本 聡教授  
開 講 日 2020年度 春学期

春学期の「日本の歴史と文化」という科目に関しては、日本伝統文化推進プロジェクトに関わって下さっている客員教授の先生方を中心に、全学を対象として、日本舞踊、能楽、茶道、書道のオムニバス形式の授業を行った。

日本舞踊は西川千雅先生（西川流家元・客員教授）、及び西川まさ子先生（西川流家元補佐）、能楽は久田勘鷗先生（シテ方観世流能楽師、重要無形文化財保持者・客員教授）、茶道は谷口剛久先生（表千家古今庵主）、書道は原田凍谷先生（中部大学准教授）がそれぞれ担当した。

総合的に全学に日本文化の息吹を芽生えさせるという趣旨は飯吉理事長の発案で始まり、日本伝統文化推進プロジェクトにより推進されている。この種子が着実に芽生えている事は、それぞれの全学の学生の生の声を聞くとわかるかと考え、なるべく多くの学科の、全ての授業を通して受けた感想を記してもらった。それぞれの専門分野に引きつけて感想を書く人や、新しい刺激を得た人の文章などが見受けられ、日本文化をもっと知らなければならないという気持ちにさせている事は、このプロジェクトそのものの試みが、ささやかながらも浸透している様子を窺う事が出来る。



能楽：久田勘鷗先生



茶道：谷口剛久先生



日本舞踊：西川千雅先生



日本舞踊：西川まさ子先生

# 学生の感想

## 経営総合学科 2年女子

- ① この講義を受けて良かった点・もっと学びたかった点  
・良かった点

義務教育の中で歴史を学ぶ機会は多くあったけれど、日本の文化に注目して専門的なことを学ぶことはできなかった。この講義を通して日本人として知っておかなければならない日本文化の歴史を学ぶことができた。また、文化についての知識だけではなく、日本人がもつ伝統的な世界観（ハレとケ）や外国の伝統舞踊からみえる地域ごとの特徴など幅広い分野を学ぶことができた。

- ・もっと学びたかった点

例えば、茶道のときに、緑茶や紅茶は同じお茶の葉から作られていると学んだが、ヨーロッパでは紅茶を飲んでいる印象が強く緑茶はあまり飲まれていないように感じる。この文化の違いはなぜ生まれたかや、日本舞踊で世界の伝統舞踊を調べたときのように日本と世界の文化との比較をもっとしてみたかったと思った。

- ② 感想

せっかく講師の先生方から直接教えていただける機会だったのに、遠隔授業になってしまいとても残念だった。しかし、モニター越しであっても日本舞踊、能楽の演技や茶道、書道の作法を見ることができ、貴重な経験を積むことができた。わたしは日本舞踊の講義動画の中で出てきた、文化がなくなってしまった国は弱いという言葉がとても印象に残っている。いま、日本の伝統文化に精

通している人はとても少なく、衰退の一途をたどっている。わたしも実際、この講義を受けるまでは日本文化に関しての知識はまったくと言っていいほど持っておらず、今まで学習する機会もなかった。自分の国の文化なのになにも知らないということが恥ずかしく、そして寂しく感じられた。あらゆる文化が共存している現代で、日本の文化を忘れないように過ごしていきたい。

## 都市建設工学科 2年男子

今まで歴史の授業などで日本の文化は中国の影響を非常に強く受けてきたことが繰り返し教えられてきた。ところがそれはただぼんやりとしたイメージだけで実例を挙げようとしてもあまり挙げるができなかった。だが今回の講義を通して茶道では中国由来の茶碗が紹介されたり、書道でも中国の文字が紹介されるなど、具体例を通してそれを理解することができた。またそれだけではなく輸入されたものを模倣して制作したり、さらにそれを基に独自のものを作り上げたりするなど、そのプロセスについても理解を深めることができた。また日本舞踊や能楽は現代では高貴なものであるように感じていたが、江戸時代には町人の大衆娯楽として栄えていたことが取り上げられていた。このことから内容はあまり変化せずに継承されていても、時代を経ると大衆娯楽が変遷していくという事についても気づかされた。このほかにもこうして長期にわたって継承されている文化にあまり知識を持たず、外からそれを眺めていると、

こうしたものを守り抜くために一つの決まりに従って続けているものであると想像していた。ところが実際はそれぞれがだんだん独自に発展していった流派が、日本舞踊や茶道などで存在していることが分かった。このことから日本舞踊や茶道などは緩やかなカテゴリーであり、その中は多岐にわたっているものであると感じた。次に気づかされた点は季節感を重視したものが多という点である。例えば茶道では菓子や茶碗の柄などに季節を重視したものが見られる。また日本舞踊では着物の柄などに季節を感じることができる。このことから日本の文化では季節感を非常に大切にしていたことが分かった。また茶室の中の掛け軸では同じ文字が様々な形で書かれていたりした。これは書道の講義を通じてただ文字があればよいというものではなく、その文字のデザイン性の中から見える美を大切にしているという事が分かった。さらに気づかされた点はそうした道を究めている者は、道具に対して極めて強いこだわりがあるという事である。例えば書道では筆や硯、茶道では茶碗や茶酌、日本舞踊や能楽では着物などである。中でもこうしたものを顕著に感じたものは茶杓である。この道具はただ茶を掬うための道具であるにも関わらず、高価なものは数百万円もするという事である。こうしたことはこの道具の希少価値を示すと同時に、そうした人々のこだわりを感じる点であった。このように実際に深く学んでみることで自分が日本の文化について実際は殆ど知らないという事に改めて気づかされた。

## 宇宙航空理工学科 2年男子

この授業を受講した理由は、もっと日本の伝統文化に触れてみたいと感じたからである。

日本の文化は高校生になるまでほとんど触れたことがなかった。しかし、日本人なら日本の文化に触れてみたいという一心で茶道部に入部した。すると世界が一気に広がった。茶道のお点前は一見堅苦しいと思えるが、一つ一つの動きに意味がある。学べば学ぶほど、無駄のない動きで美しい形となって完成されていることがわかる。しかし、ただの手順という事だけではなかった。お茶を点てることによって亭主と客人との間に「和敬清寂」の心が生まれることに意味があるのである。そして、この茶道の基本精神である「和敬清寂」の精神を活かして人脈も広がった。今の人間関係も茶道を嗜んでいなければ不可能だったと感じる。現代では平気で人を傷つけるような心が荒んだ人が多い。物事に動じない心を鍛えていく茶道は、今の時代にこそ必要だと考えられる。

日本の伝統文化を通じて気付いたことがある。それは、日本舞踊や能にもその所作の一つ一つに深い意味があって合理的にできていることである。例えば、能では所作一つで無表情なはずの能面で喜怒哀楽のすべてを表現している。一般的には意味のわからない所作が多いが、ふとした瞬間にその理由がわかることがある。発見の先に学びを深める楽しさがあり、さらには合理と非合理を越えた所に日本の伝統文化の美があると感じる。これらはすべて日本の風土が育ててきた文化の結晶である。その中には日本人として生き抜くための知恵や長年にわたり受け継がれてきた考え方がある。

世界から賞賛される日本の精神性の根本は、日本文化の中にこそあるのではないかと感じる。そして日本の伝統文化は世界に誇ることのできる文化だと断言できる。



## 応用生物化学科 2年女子

### 日本舞踊

日本舞踊を学んで思ったことは、舞踊が翻訳造語ということにまず驚きました。日本独自の文化にも歴史の中で変化がもたらされていて今に伝わっているということを表しているのだなと思いました。私生活でも使う御辞儀の意味と種類がたくさんあることを教えていただき、知識を得たからこそ丁寧に御辞儀ができると思いました。国々にそれぞれ挨拶があるように、日本にも意味のある挨拶があるということがわかって良かったです。

### 能楽

能楽は歌舞伎と違うということにまず知りました。能楽と、歌舞伎の違いを知った上で見ると謡に乗せて役者が踊るということが確かに違うとわかりました。今回は狸々について学びましたが、狸々の内容を知った上での能楽鑑賞はわかりやすく印象に残っています。内容をあらかじめ少しでも知っていれば楽しめるのだと思えました。

### 茶道

茶道という言葉は現代語ということにまず驚きました。初めてお茶を点てるところを見たので、温度や立て方など細かく順序があることを学びました。おいしいお茶とお菓子を一緒にいただみたいと思いました。

茶道の道具にはいろいろきまりがあり、また言葉もたくさんあるため見て聞くだけではわかりにくい深い文化だということもわかりました。

### 書道

まさか写経すると思っていなかったのもとても般若心経が印象深いです。なかなかない経験をさせていただきました。書道が得意じゃないので全文書くのは大変で、集中しましたが、本当に精神統一のような効果があるのだなと思いました。書いた後にすっきりとした気持ちになって、とても達成感がありました。



## 英語英米文化学科 2年男子

私はこれまでの授業を受けて日本文化には大きく二つの特徴があると感じました。一つ目は、四季を重要視している点です。今回あった能楽にあったように季節にまつわる花や現象を話にしたものを演じることや、茶道では季節にまつわる世間話を演じることや、

をはじめとする季節のお菓子なども存在しており、日本は訪れる四季に敏感で、それを楽しむ文化であると感じました。

二つ目は型を重視している点です。今回受けた授業の中の日本文化にはすべて型があり、それいかに近づけるかが美しさとされていたように感じました。日本舞踊にも能にも踊りの型があり、茶道にも飲み方などをはじめとする所作があり、習字には様々な書き方がありますが、当然型があります。私も、剣道を十年以上やってきましたが、未だに師範などにみていただく際には、私のフォームについて多く指摘をいただきます。これまでやってきて当たっていても型が崩れているから一本にならないなど多くありました。こう言った経験も踏まえて、日本文化には型を重要視する傾向があると思いました。現在でも日本では多くの人たちが型にはまることを良しとしていると思います。また、逆に型破りな人を批判する傾向にあると思います。その中で、日本舞踊の西川先生は伝統を大切にしつつ、現代に合わせて型破りなことをされているのでとても簡単にはできない素晴らしいことだと思いました。

### **歴史地理学科 2年男子**

私は日本舞踊、能楽、茶道、書道の日本の伝統文化に触れたことで、それまで自分の知識や概念にあったものとは違った視点で日本の古き伝統文化の良さを感じることができた。そのなかでも特に日本舞踊と能楽を、今までとは違った視点でとらえることができた。

日本舞踊では、この授業を受けるまでは踊る人

の外見だけを重視して見るだけで、特に深い理由を持って日本舞踊を捉えていなかった。しかし、この授業を受けて日本舞踊の知識を学び、細かいところまで器用に手足を動かさなければならないことや、一曲で何人もの役を演じなければならないなど外見以外にも重視する点が多くあると感じた。また、授業のなかで実際に先生の真似をして日本舞踊を体験するという時間があったが、想像以上に日本舞踊の難しさ、魅力を感じることができ、技術中心ではなく、表現力が必要だという新しい考え方を持つことができた。

能楽では、右手に持った扇をいったん右方によけた後に、体の前を救い上げるようにして前方に出す型である「打ち込み」や右手に持った扇をいったん右によけた後に体の前を救い上げるようにして前方に出す型である「左右」などを学んだことで能楽の良さを改めて感じる事ができた。また、能楽は静まりかえっている会場内に響きわたる出演者の独特の声や、笛などの楽器を演奏している人が奏でる音も非常に迫力があり、観客と出演者が一体となってこの雰囲気を作り上げていると感じた。

最後にこの授業を受けて改めて日本の伝統文化の良さを感じることができた。これを次世代の若者に伝えていく必要があり、そのためには、私を含め若者層が、より日本文化についての探求心を持ち、理解を深めることが必要であると考えた。

### **コミュニケーション学科 2年女子**

授業を受講したことで、日本の文化についての知識を身につけることが出来た。初めて知った内

容が多く、日本文化についての知識が少なかったことを感じた。日本文化に触れる機会が少なかったため、日本舞踊や能楽については知らないことがほとんどだった。そして、今までは日本文化に対して、日本で昔から伝わっている文化だというイメージが強く、気軽に体験することが出来ないものだと思っていた。今回の授業を通して、日本文化に触れることの大切さを学ぶことができ、昔から大切にされている日本の誇りだと感じた。茶道と書道は今までも体験したことがあったが、自分が思っていたものと異なることが多く、興味深い内容だった。特に印象に残っている内容は書道の写経だ。今までも体験してみたいと思う気持ちはあったが、実際に体験したのは初めてだった。書き順や誤字脱字の訂正方法など、小中高校で学習した書道とは異なる点が多く、難しかった。今までも興味を持っていた内容だったが、更に興味を持ち、今後も体験したいと思った。日本舞踊と能楽については、映像での鑑賞も迫力があって魅力的で、実際に鑑賞したいという気持ちが強くなった。

以上のように今回の授業を通して、日本文化についての知識を身につけるだけでなく、日本文化に対する興味、関心を持つことが出来た。そして、日本文化を学ぶことが現代の若者にとって必要だと感じた。ネット社会で新しい文化が次々に現れているが、古くから日本に伝わっている文化も忘れてはいけない。今までの生活で、私のように誤った知識を持っている人が多いように感じた。時代の流れに合わせて新しいものを取り入れることは、生きていくために必要なことだ。しかし、今まで

の歴史や文化を知ることによって現在の技術の進歩を感じることが出来るだろう。今後も日本文化に触れる機会を大切にしたいと考える。日本舞踊、能楽、茶道、書道について理解を深めるとともに、他の日本文化に関しても学びたいと考えている。



#### 日本語日本文化学科 2年男子

私は日本舞踊や能楽、茶道、書道を通して、日本の伝統文化には日常である「ケ」の部分が大きく関わっていることを知ることができた。これまで、伝統文化は自分とは遠い存在であると思っていたが、お茶を飲む習慣が自分にもあることから、無関係なものではないと思った。例えば、歌舞伎の「見栄を切る」行為は観客を注目させるためのものであり、これが現代まで受け継がれ「○○戦隊」などの登場シーンで子供たちの注目を集めるための決めポーズとして、今のエンターテインメントにも活用されていることを知った。また、字を綺麗に書くことが苦手なので書道に苦手意識があったが、実際に写経をしてみると長時間集中力を持続させて字を書くことで、書道に対して興味を持つことができた。気づいていないだけで伝統文化が現代のエンターテインメントや芸術などに根付いていることから、日本人には日本の伝統文化が

あっているのではないかと思った。

伝統文化を学ぶことで自分の礼儀作法や姿勢、所作の美しさ、気配りを身につけることができる。立場が上の人の言うことを素直に聞くことができるようになるため、就職に有利になり、人間関係の構築に役立つ事にもつながるだろう。また、伝統文化は実際に体験することで心を豊かにすることができることに知った。日本舞踊は憂鬱な気分を吹き飛ばし、能楽は想像力を高め、茶道や書道は日常を彩ることができる。現在は国際化が進んでおり、様々な場面で外国人と関わる機会があるため、自分の文化を相手に伝えられなければ、国際社会でのアイデンティティを失ってしまう。しかし、伝統文化を語れるようになることは、国際社会でのアイデンティティを取り戻すだけでなく、自分が何者であるかを理解することに繋がると私は考える。今後も伝統文化を学んでいきたい。

### スポーツ保健医療学科 2年男子

私が日本文化に対して感じた事は、文化に終わりは無く、悠久の時を歩んでいくという事だ。では、文化の終焉はいつ訪れるのだろうか。それは、語り継がれなくなった時である。日本文化に限らず、魅力あふれる人や紡がれた言葉、はたまた野球などのスポーツに至るまで、必ず第三者の存在がある。第三者がその魅力を別の第三者に伝えていく。日本文化はそれを古くから行ってきたのである。

しかし、それは簡単なことではなく、例えば法律も、現代社会にそぐわなければどんなに「思い」が込められていても変えられてしまい、会社でよく行われる引継ぎに関しても、当人がこれまで経

験してきた事を第三者に100%受け継ぐ事は難しいはずである。

では、なぜ日本文化は初期と遜色なく継承する事が出来たのであろうか。それは、受け手の姿勢に鍵があると考えている。私は文化とは「思い」であると考えている。つまり、「思い」の量にどれだけ魅力を感じ、聞き手である第三者が傾聴しようとする姿勢が、継承に繋がったのだと考える。言い換えると、日本文化の多くは、魅力を際限なく受け継ぐ事のできた聞き手の存在が受け継ぐ事を可能としたのである。

最後に、現代においてその「聞き手」が我々である。もちろん、現代は様々な文化やメディアがあり日本文化に固執しなければいけない訳ではない。しかしながら、少なくとも魅力は受け継ぐ事が可能であると過去の聞き手が証明してくれた。新しい魅力に出会ったとき、それを受け継いでいきたいのならば、それを聞き手が聞きたいと思える魅力を作っていく事が我々の使命であり、それを行う事で過去の彼らと同様に、悠久の時を歩んでいけるのかもしれない。

### 国際学科 3年女子

今回この日本伝統文化の講義において普段の生活では接触することはないけれど、日本という国の文化や印象を形作るのに大きく貢献してきた日本文化に沢山触れることが出来ました。そして今までその文化について知らなかったことを学べましたし、新しく見つけた点もたくさんありました。

日本舞踊は日常生活から取り入れた動作でアップテンポなものではないが、手の動きを主体とし



たなめらかで上品な踊りは、どの国にも負けず劣らず美しいと思えました。また、日本らしい礼儀や作法は、この日本舞踊から来ているといっても過言では無いということも分かりました。

能楽も同様に、激しい動きでは無いけれど、語り手に合わせ扇を使って踊りながら物語を表現することによって、直接的に話す以上に物語を観客の頭の中でイメージさせていく手法が素晴らしいと思えました。今の技術では映像を編集して昔話を語り継ぐ事も出来ますが、何でも最新技術に合わせるのではなく、その時代の雰囲気そのまま伝えられる手法で語り継がれてほしいと感じました。

茶道は厳しい空間の中、厳格な人が好む文化だという印象がありましたが、講義を受けて少し印象が変わりました。適切な作法で礼儀を重んじなければならないというのはもちろんそうでしたが、茶室によっては気にせずゆったりと空間を楽しんでも良い場合があると知って少し驚きました。「和敬清寂」や「お茶を濁す」という茶道から作られた言葉もなんとなく使っていましたが、しっかりと由来を知ることが出来たので勉強になりました。

書道の授業は1回しかありませんでしたが般若心経を筆で書くというとても貴重な体験が出来ました。今の時代では筆はおろか、鉛筆やペンでさえも使う頻度が落ちてきています。最近になってからは遠隔授業のため、今回筆を握ったときは思わず姿勢を正してしまうほど緊張しました。パソコンで文字を打つだけではなんだか無機質な感じがしますが、筆で文字を書くと、自分らしさが表

われているのが分かり、とても集中できました。

今回の講義で扱った文化はどれも今まで生きてきた中で一度は聞いたこと、触れたことのある文化ばかりでした。授業であったり、イベントであったり、触れる機会があったにも関わらず、今回ほど深く知る事ができなかったことは今ではとても残念なことにように思えます。現代ではサブカルチャー、文化交流などで日本と異国の文化が混じっている状態です。世界中と親交を深められることは利点ですが、それが深まるにつれ次世代の日本文化の理解が薄くなってしまっているのではないかと感じてしまいます。私も弓道をやっているので武道という面で日本文化には日常的に触れられているのかなと思っていますが、初対面の人にこれを伝えると意外そうな顔をされます。広義的に解釈するとやはり日本文化は馴染みが薄い分野になってしまっているのかと少し寂しく思います。海外に日本の良さを伝えるのもやはり重要なことですが、それをつないでいく私たちの世代がそれ以上に日本文化に関心を持ち知っていくべきなのではないかと本講義を受けて感じました。

## 幼児教育学科 2年女子

今回日本の歴史と文化を学び、名前を知っていてもどんなものなのか詳しく知らないものがたくさんあった。その中でも、書道の写経や日本舞踊のNOSS（にほん、おどり、スポーツ、サイエンスの略）などは授業内で体験できたので、より身近に感じる事ができた。今回いくつかの日本の文化、歴史を学び、日本の文化というものは継承されてくる中で自分たちに合う形に変化させてき

たことが特徴だと分かった。ルーツを学ぶと日本以外のものもあるが、そこは大した問題にしていない。そこから生まれたもの、進化させたものを大切にしている。つまり「国風化」させてきたという事になるのではないか。

前回のレポートで日本の歴史や文化について学ぶことは、自国の理解を深めるためだと書いた。しかしそれだけではなく、文化を守っていくためでもあると感じた。習っているとか習っていないということではなく、どのようなものかわからないから自分には関係ないと考え、「知る」ということもしない。こうして人の中から文化が消えてしまうのは悲しいことだと感じる。頭の片隅にこんな文化が存在するというを入れておくだけでも変わってくるのではないか。どうしても海外のほうが自国の文化に誇りを持っているように感じる。日本の文化は海外から高い評価を受けているにもかかわらず、それを日本人が説明できないのではもったいない。私たちの生活の中に根付いている和食やお祭り、伝統行事などの文化のように身近に感じられるようになればいいと思う。

幼児教育について学んでいるので、幼児が日本の文化に触れる機会についても考えてみた。幼稚園教育要領や保育所保育指針のなかに、子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培うため、5つの領域が記載されている。その中の「環境」の領域に、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむという内容がある。ほかの文化に触れることと同じくらい、自国の文化に触れることは大切とされている。季節の行事や独楽や凧などの伝統的な遊びだけでなく、

茶道や日本舞踊に触れる機会を設けている園もある。日本の文化や伝統に親しむ中で社会とのつながりの意識や国際理解の意識が芽生えていく。幼児期にこのような体験をすることは、将来の国民としての情操や意識の芽生えを培う上でも大切とされている。保育者は伝統を伝える人と子どもたちをつなげる役目も担っていると思う。世界を知ることもちろん大切なことだが、その前にもう一度日本の文化というものを「知る」ことが大切だと感じた。

# 原田凍谷書道展

## 「百人一首を現代書で書く」

百人一首は諳んじる会員もいて、心惹かれる歌に作品の創意が湧く題材。仮名文字ではない、現代文で各々の表現を広げていく中に、今を感じずる百人一首が見つけれられるのではないか。

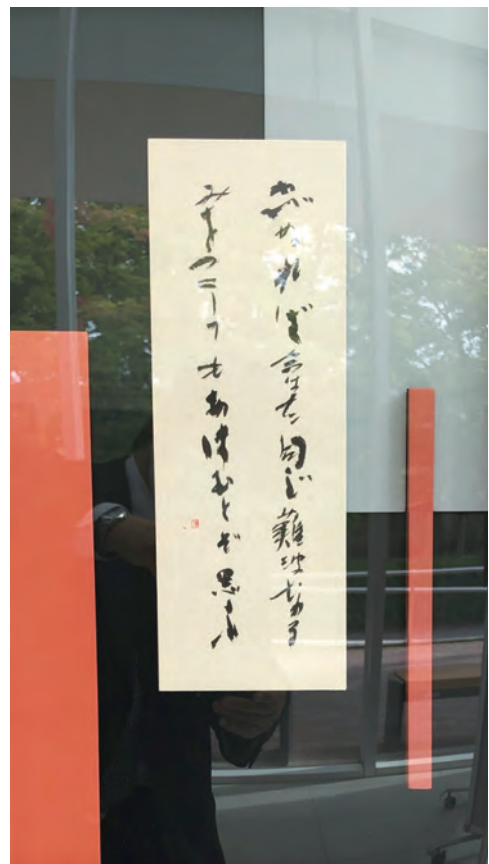
印刷のない平安時代は能書家と呼ばれる名手が、特別な依頼を受けて美しい料紙に和歌を書き、本を作った。今に伝わる古筆と呼ばれる仮名の名品がそれである。

現代は活字印刷があり、手書きの本は少ないが、実用から離れて「書く」という文化がある。

今回、料紙に変わり各自がデザインした額に、百人一首を「現代的な散らし書き」で書く挑戦をした。文字に歌意を込める人はいるが、文字・額装・雅仙紙全体で見せる意識で美を求めれば、料紙に描いた古来の気分を味わえたのではないかと思う。

平安の美を心に置きながら、現代に飾る書として見ていただけたら嬉しい。

原田凍谷



# 放送研究会の活動

国際人間学研究科言語文化専攻博士前期課程1年 安永知加子

人文学部コミュニケーション学科3年 荒川 杏菜

今年度は、本学のクラブである放送研究会が、本プロジェクトのイベントを撮影することになった。放送研究会では、隔週水曜日の昼休みにCHUCHU テレラジという生放送番組を放送しており、春日井市周辺で放送されているケーブルテレビ（CCNet）で中部大学アワーという番組を放送している。本プロジェクトのイベント撮影は、そのような活動の一環として行った。

コロナ禍のため、残念ながら能楽鑑賞会は学生の参加が禁止され、撮影することができなかったが、からくり人形公演会、百人一首講演会、講談・落語の公演会は撮影し、参加学生にインタビューすることもできた。からくり人形公演会は、2021年1月13日に本学での生放送に使用し、YouTubeで限定公開（URLを知っているユーザーのみ視聴可）にした。また、CCNetに2月放映番組として納品し、放映された。百人一首講演会、講談・落語の公演会は、CCNetの3月以降の番組として、現在調整中である。

各イベント後のインタビューでは、学生から次のような感想を聞くことができた。



九代目玉屋庄兵衛氏にインタビューする  
放送研究会のメンバー

## からくり人形公演会

Q. 今回の講演会の感想をお願いします。

—技術大国といわれている日本のものづくりの原点を見させていただいたような感じがします。富国強兵のために海外から技術を大きく取り入れた明治時代の前、江戸時代からあのような形で細かな技術が発展してきた様が見られたのは非常に良かったと思っています。

（ロボット理工学科）

—ロボットの原点であるからくりというものを見て、ロボットのメカニズムの原点というものがはっきりわかったような気がしました。これからのロボット製作にうまく使っていただければいいなと思いました。

（ロボット理工学科）

Q. どの人形がいちばん心に残っていますか？

—矢を射る矢文の人形がいちばん印象に残っています。機構のすごさは言うまでもありませんが、各職人が作った芸術のごとき美しさを見て、まさに日本の伝統工芸の極地だという気がしました。  
(ロボット理工学科)

—災害などで重要になってくるのは人を救助するロボットです。お茶を運んでくれる人形を見て、それをリメイクして人々を救えるものに変えることができたらなと思いました。  
(ロボット理工学科)

### 百人一首講演会

Q. 今回の講演会の感想をお願いします。

—百人一首は大昔の話だと思っていましたが、今日のお話を聞いてみて、おもしろくって、共感できるところがたくさんありました。紹介されたマンガも読んでみたいと思いました。  
(日本語日本文化学科)

—千年以上前の趣深さは現代にも通じるものがあると思いました。参加して良かったです。  
(日本語日本文化学科)

### 講談・落語の公演会

Q. 今回の講演会の感想をお願いします。

—講談や落語というのは実際に見たことがなくて、当初のイメージでは堅苦しい感じかと思っていましたが、実際に聴いてみると、冗談などを挟んだり、お客さんを引き込むような工夫がたくさんされていたりして、大いに楽しむことができました。  
(日本語日本文化学科)

Q. この講演会で印象に残ったことをお願いします。

—私も講談や落語を聞いたのは今回が初めてでしたが、最前列に座っていても会場全体のお客さんがすごく真剣に聞いているのがわかりました。言葉で伝える力というものを実感することができました。  
(日本語日本文化学科)

以上の学生のほかにもインタビューに応じてくれた学生がいるが、紙幅の都合で、残念ながら割愛させていただいた。インタビューに協力していただいた学生の皆さんには心より感謝の意を表したい。

放送研究会では、来年度以降もこのようなイベントが開催されたら、ぜひ取材、撮影をしたいと考えている。

## 2020年度 日本伝統文化推進プロジェクト 活動記録

### 第1回日本伝統文化推進プロジェクト会議

日 時：2020年4月17日（金） 13時30分～15時00分

場 所：大学会議室

### 第2回日本伝統文化推進プロジェクト会議

日 時：2020年9月3日（木） 15時30分～16時30分

場 所：大学会議室

### 第3回日本伝統文化推進プロジェクト会議

日 時：2020年10月15日（木） 13時30分～14時30分

場 所：大学会議室

### 第4回日本伝統文化推進プロジェクト会議

日 時：2020年12月10日（木） 13時30分～14時30分

場 所：大学会議室

### 第5回日本伝統文化推進プロジェクト会議

日 時：2021年1月21日（木） 13時30分～14時30分

場 所：大学会議室

### 第6回日本伝統文化推進プロジェクト会議

日 時：2021年2月10日（水） 13時30分～14時30分

場 所：大学会議室

### 第7回日本伝統文化推進プロジェクト会議

日 時：2021年3月24日（水） 13時30分～14時30分

場 所：大学会議室

## 中部大学日本伝統文化推進プロジェクト名簿

リーダー	副学長	辻本 雅史
	常勤理事・総長補佐	山田 公夫 ※2021年2月12日逝去
	工学部ロボット理工学科	教授 高丸 尚教
	人文学部日本語日本文化学科	教授 永田 典子
	〃	教授 岡本 聡
	超伝導・持続可能エネルギー研究センター	教授 井上 徳之
	法人事務局長	垣立 昌寛
	人文学部事務室事務長	永平 三喜
(プロジェクトの庶務) 人文学部事務室		



# 日本伝統文化推進プロジェクト 2020 年度活動報告書

2021 年 4 月発行

編集・発行 中部大学日本伝統文化推進プロジェクト

〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 番地

中部大学人文学部事務室







中部大学